特116
615

新綠

期後

第一集

東京

新綠社

国立国会
51.10.1
図書館

始

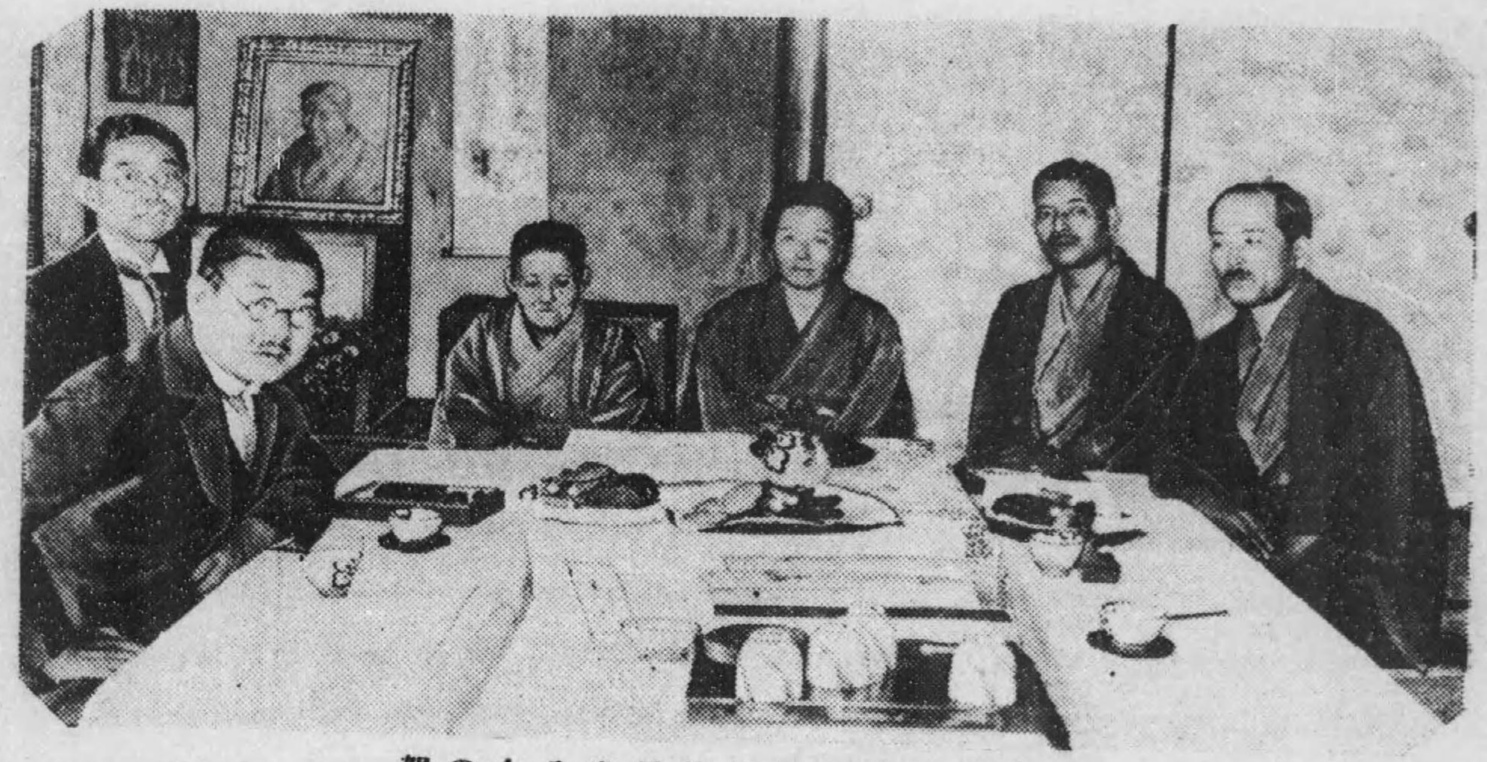
特116
615

新緑期後第一集

東京 新緑社

中野三九寄贈本

大正
14. 2. 2
寄贈



大正十三年六月子規母堂八十の賀
（寫眞向て右より）

知三　子不　子不　不
白允　令妹　規堂　喚母　樓句

新緑後期第一集序

中野三允

新緑社は大正拾參年五月二十二日を以て再興した、創立の同人伊東牛歩、齋藤知白及び中野三允で、正社員は此三人を以て限られてある、三人中一人の落伍者なく、自然の恩寵に浴しての人生の淨化に精進する、其道程に渇きを止める命の水のこんこんと湧けるに口づけした瞬間こそ、吾等が藝術の三昧である、他の何者の賞讃も、嘲罵も、顧念するに遑のない境地に居て咏んだところの、夏の句と秋の句を集め、一部となしたのが此册子に外ならない。……採錄の標準は寧ろ寛に流れて凡作を擧ぐるも、嚴に失して佳吟を遺さゞらんと努めた、よりよき人生への脱ぎ殼に多少の破綻があるからとて、發表を躊躇するの要はない、そこで最後に……乍併……念のため、吾等が無反省ならざるを立證する手段として、次の如き企をしても差支ない、即ち「新緑後期第一集懸賞名句

序

探し」といふのだ、無ければ無いと答へてよいのである。

行年のぬかるみの瓦斯漏れ

（附記）尙新緑社の正社員は今日三人に限られてあるが、時に三人以外の者の加はることを妨げぬ、卽ち本集にも耕村、芳河士の名の見える所以である。

（大正十三年十二月二十六日、小石川區關口町六五俳毒庵に於て）

中野三允著

俳遍路

四國ハ弘法大師誕生ノ地デアッテ之レガ歸依者ハ大師ニ緣アル八十八ケ所ヲ巡拜シマス、小生等ハコ、ニ所謂俳遍路ヲ企テ大師ノ御遺跡ヲ訪ル、コト、イタシマシタ、其記念トシテ、四國以外途上往返ノ見聞ヲモ詳細ニ記シ感想ヲ加ヘ俳句ニ川柳ニ其他ノ作物ヲ交ヘ全努力ヲ以テ後世ニ遺サントノ覺悟デアリマス、從テ本書ハ一面新緑社ノ句錄トモ見ラレルノデアル、此段豫メ御披露申上ゲマス

目次

新緑……（一）
蠅……（二）
花菖蒲……（四）
行々子……（五）
梅雨……（七）
攝政宮御成婚奉祝……（九）
田植……（一〇）
正王寺への鳴日吟……（一二）
麥秋……（一五）
子規母堂八十の賀……（一七）
繭……（一八）
羽蟻……（二〇）
晝顔……（二三）
蛇……（二四）
夏帽……（二六）
蚤……（二七）
清水……（二八）
誘蛾燈……（三〇）
芳河士歡迎……（三二）
水喧嘩……（三二）
土用……（三四）
水雞……（三五）

目次

夏足袋……(三七)
鮎……(三九)
汗……(四〇)
日傘……(四二)
稲妻……(四三)
枝豆……(四五)
初嵐……(四七)
震災一週年……(四九)
蓑虫……(五二)
續震災一週年……(五四)
子規忌……(五六)
栗……(五八)
大龍寺詣……(六〇)
蜻蛉……(六一)
秋晴……(六三)
コスモス……(六六)
實柘榴……(六八)
夜寒……(六九)
柿……(七一)
夜長……(七二)
渡り鳥……(七四)
(附錄)みどり兒の泣く音……(七六)
子規母堂八十の賀……(卷頭寫眞)

新緑後期第一集目次(終)

新緑後期第一集

○大正十三年五月二十二日東京市本郷區西片町十番地齋藤知白庵に於て新緑社復興第一回句會開催

新緑に我句帳編まば此の型　牛歩
新緑に若かりし頃の寫眞見る　同
新緑に我建て〻我住む庵　同
菖蒲園ある村をつゝみし新緑　同
新緑吹込む左側の赤いポスト　知白
新緑流るゝ牛の涎流るゝ　同
一ト日の若やぎの新緑に融け込んだ　同
手足を新緑に洗つた蘇り　同
青年息はづませて新緑に立ち　同

新緑蠅

日光深く新緑を吸込で大湖　同
新緑の庵にて大いなる熊の敷皮　三允
書痴の主にカナリヤの囀り新緑　同
新緑にせゝらぎのリズムを聞き居り　同
新緑の縁に義足投げ出して親しさ　同
ガスが晴れた旭川新緑の一ツ時　同
雨にぬれたる新緑である月夜かな　同
新緑の候とある友垣よりの文の初めに　同
モデルの肱の力瘤隆々たる新緑　同
畫のテニスの音が月の新緑に漂ひ　同

○大正十三年六月一日、知白庵に於て第二回開催

隔てなき二人がいつまで語る銀皿の蠅　知白

蠅

果てしなき腹立しさ蠅の甜むるに任せる　同
西日蠅の靜けさをひよつこり御用きゝ　同
その日のパンを得た喜びの足を投げて蠅　同
かうなつてはハッキリと蠅にも親しみをもてる　同
蠅の足温みほどでも戀は明るい　同
拜がんでは甜むる蠅祭りの賽物哉　同
日毎殖えて蠅取紙買ふ日となり　牛歩
けふ一日腹立つまじき蠅の庵主　同
蠅の中で足手のび行く子等　同
蠅取紙幾枚か代へて病ひ長びく　同
手の甲を蠅に吸はるゝフランデルさん　三允
馬のしゝむら離れぬ蠅の執着を見る　同

蠅　花菖蒲

百合の莟の含らみに今日も見る蠅　同
ビールに溺るゝ蠅を飲だる談論風發　同
蠅の生活と變りもないと或日の日記に　同
うるさい蠅からつと立て電話の受話機　同
カーテンゆれ居り夜の蠅とまりたるまゝ　同

○

花菖蒲の頃になつても二人の仲は　牛歩
船を上げられてから菖蒲園迄の遠さ　同
菖蒲の容の途方もないふざけやう　同
菖蒲園と菖蒲園の間の木下闇　同
雨になつても花菖蒲切りやめず　同
花菖蒲小娘の情念に僞はあるまい　知白

花菖蒲滿月の水萬に鶴　同
花菖蒲の女の飛白の荒つぽいこと　同
風呂敷包みをかゝへて女が花菖蒲に立ち　同
色彩の世界線の世界花菖蒲とりく　三允
眞善美紫のゆかりの菖蒲一もと　同
絶望の肯定花菖蒲すがりと切り　同
どふやら晴れた空模樣の菖蒲見がてら　同

子規毋堂誕生日

紫のゆかりの一本の菖蒲の晴れ　同

○大正十三年六月六日齋藤知白庵に於て第三回開催

行々子淫らな口はきくまい　知白
行々子を追かけて大海原につきあたつた　同
よし切にくるゝもかくまで酒がうまき　同

花菖蒲　行々子

行々子

よし切空に消えて暴風が來さうだ　同
行々子にのほせて娘は出奔した　同
よし切宙に消えて暴風が來さうだ　同
太陽眞下よし切に浪が寄せ來る　同
よし切ビールならいくらでも飲める　牛歩
よし切神經衰弱といふことを知つてるか　同
流れ〳〵て落ち行く先はよし切り　同
新らしい運河の廣さのよし切り　三允
やはらかい土に土不踏が冷めたい葭切　同
よし切に柳の茂り描き過ぎたり　同
好きならば船虫をみんな喰へ葭切　同
船頭欠びして小便すよし切　同

葭切の眞晝船べりに幽靈が出た　同
排水路行々子彼方此方に　同
自動車こんな處まで埃をあげて葭切　同
船べり誰も居らぬに居るといふ葭切　同
柳に下つて死んでるセイゴだ葭切　同

○

蟻の行列があつてから梅雨に入り　牛歩
何の木の花の香ぞ梅雨の道　同
拭きこんだ緣に梅雨の柱がうつる　同
梅雨の庭に植えてコスモス直ぐつく　同
燒け殘つた町のきたない梅雨入　同
梅雨の家の月給日丈けの明るさ　知白
梅雨明り又貯金帳を出して見た　同

行々子　梅雨

梅雨

から梅雨の二階で今日もいひつのつて居る　同
梅雨を忘れた顔が蹣つて女でも買に行かう　同
梅雨家並星根草が伸びて病人が出る　同
梅雨一番の御馳走のジャガタラ顔をそむけまいぞ　同
梅雨の框から會釋されたが一寸も見知らぬ　同
忘れられた沈默がカナリヤにもある梅雨　三九
去年の地震と同じやうな天氣の梅雨風　同
買つたばかりの鍔廣の夏帽の梅雨　同
梅雨寒の蠶を手の平に這はせ　同
梅雨寒の高頬のほくろの長い毛　同
梅雨雲の切れ目を日輪出でよとカナリヤ　同
青い日輪の跳躍が自分に丈けよく見える梅雨　同

以下攝政宮御成婚奉祝句

○

波鼓して祝ぐ大わだつみも涼しう　知白
薫風この吉き日ときわに堅磐に　同
天長地久新緑の御契尊と　同
ありたけの辭を列ねて奉祝の行々子　牛歩
薫風永へに國民へ御答への御言葉　同
新緑いよ〳〵こまやかなる御喜び　同
梅雨空の旗行列日輪手に〳〵　三九
サーチライトに霞切り鳴くなり　同
御詞が今も耳にあるる薫風　同
御詞を全く聞き得られたる新緑　同

摂政宮御成婚奉祝句　田植

よし切りも川蟬も御成婚をことほぎ　同

色紙二枚畏こさの御歌風薫る　同

神代さながらの御二柱風薫る　同

○大正十三年六月八日午前十一時東京府下南綾瀬下千葉正王寺伊東牛歩庵に於て第四回開催

田植盛りの知らない村を通り牛　歩

田植の忙しさを眺めても居られず　同

早乙女植ゑまけてくやしい戀敵　同

田植賑やかな中の主の野良聲　同

森の翠微を通して田植きこえる　同

田植見そめし遍路日記土佐に入る　同

田植さかる中の正王寺の閑　同

植ゑ終えた喜びは村一番の大田　同

田植唄遠し煙突いつも烟を吐く　知白

植うる田の鰌掬ひふざけなさんな　同

田植の音頭を取つたり媒をしたり叔父さん　同

田植酒となりて小作のなやましさもなし　同

娘の手のぬくもり一摑みの早苗をすてず　同

早乙女の手拭は憎い程になまめく　同

砂利敷かぬ田植の小路にて下駄の歯　三允

ピアノが聞えてこゝら田植の蛙かな　同

田植見てから正王寺へと曲る立札　同

五十三次の田植幾ところ廣重　同

長い〳〵掘切橋渡り終れば田植哉　同

足くびが痛くなつた今日の田植見物　同

田植　正王寺への鳴目吟

郵便はこゝで貰はう　田植の泥手　同
田植の人が親切に釣場教へてくれた　同
田植の餘り水が瀧と落ち來る崖　同
田植濟んだる景色四ッ手の雫かな　同
田植寫生も南孕む帆景となり　同
鐘紡の汽笛田植は尙三うぬ　同
此村の學校は地震で潰れなかつた田植　同

○

以下正王寺への鳴目吟

柿の花の庵主去來豆柿の花の庵主牛歩　知白
大師千年塔を前に赤門の梅雨入　同
早苗運ぶ朝鮮牛に日本の五月雨　同

苗代に鳥が下りてから風が變つた　同
白い慢幕をかゝげ寺座敷の葉櫻　同
葉櫻鐘紡の親株に子株のつく景氣　同
雨雲垂れて堀切橋二百四十間の葭切　同
豆柿の花が咲いて子供等の砂いぢり　同
土蛸くるりと逃げて正王寺の道に出た　同
虫封の長い御祈禱の葉櫻　同
寺垣となりて高野槇の新芽の光　同
柿の病葉垂れ下つて古い赤門　牛歩
柘植の花ちり敷く土もちした庭　同
八ッ手廣葉の蔭に片づかぬ物置　同
地震柱根深く堂裏の木下闇　同

正王寺への嘱目吟

飛石まだ置かぬ庭で梅雨の下駄　同
梅雨一日靜かに霽れて八ッ手廣葉　同
砂遊び出來ぬ日曜の子等梅雨いつまで　同
寺の茂りが田を隔てゝ鎭守の茂りにつゞく　同
よし切夜鳴く堀切橋の小雨　三允
豆柿休み年で梅雨寒の幹　同
あれは豆柿これはほんとの柿の花　同
よし切の巣襲ふ名の知れぬ鳥を見た　同
足駄の爪皮に蛙子ちよこなんと乘つたり　同
葭切がしみ〳〵と聞かれた今日の滿足　同
圃が移された正王寺で花南天もまた　同
餘り早苗が積上げられて自轉車の邪魔　同

藥塀圍ひの胡瓜畑の黄い花が覗かれ　同
菖蒲園道あら畫顔が咲いてるは　同

○大正十三年六月十四日午後一時俳毒庵に於て第五回開催

穂麥風立たずいつの間に海暮るゝ　知白
穂麥の波平ら飛び〳〵の森の小鳥　同
穂麥の中を行く鮎掛の笠が並んで　同
穂麥摑んで大東京を描いてゐる　同
麥熟るればこゝの亭主はよい御亭主　同
上ぼり下りの汽車心なくいつか麥熟れ　同
情ない歡喜天樣麥秋のいつまで寡婦で居られる　同
丘のだん〳〵穂麥沖に汽船がかゝり　同
麥秋の村賣れない魚屋が一軒　牛歩

麥秋

麥秋の村に閑さうな郵便局　同
麥干し終えて朝靄靜かにあがる　同
金毘羅街道一本みちの麥埃り　同
新聞龜相に見た麥秋の文藝便り　三
跳足の客に曲り緣の麥埃りを拂ひ　同
高野槇の垣が麥埃りでよごれたゞ月　同
麥埃りにも初茄子ちぎるを忘れず　同
挨拶の頰冠りそのまゝに〳〵麥秋　同
これこんなに手の甲の麥埃り　同
麥秋の小一里を註文の洋食が運ばれ　同
地面持ちは沖漁休む麥仕事　同
麥熟れて居るリヤカにのつて急な用　同

麥埃りだ按摩さんもつとそつちを　同
麥埃りに大きく一つのめした　同

○

以下子規母堂八十の賀句

御白髮も涼しさうに見上げ申す　牛歩
脊ぐゝまり給へどいつも涼しけに　同
壯丹の厄月もなく老い給ひし　同
八十の御聲とは思へぬ涼しさ　同
衣更て今日も糸瓜に灌がれし　知白
なめくじの文字蝸牛の道も壽ぐ　同
まい〳〵の舞まろく子々の躍り高く祝ぐ　同
糸瓜雜頭の伸び今日は六月六日　同

子規母堂八十の賀　繭

風雨八十年の御健やかさの袷　同

蓑のそり〳〵庭隅に祝ぎ顔　同

この日にこやかな媼の顔に薫風　三允

糸瓜苗に聲あり聞けば祝ひの句　同

雞頭の苗この日歡喜の梅雨晴　同

糸瓜苗に培ひて聖母マリヤ在ます　同

摩耶夫人健かに老いて薫風　同

○大正十三年六月二十一日知白庵に於て第六回開催

大紙幣一枚のありがた味繭賣て　牛歩

表から裏へ吹きぬけな大きな家の繭　同

家も大きな繭の籠も大きな　同

信州の繭買と語る大和めぐりの汽車の中　同

檀家の施物はあてにせぬ繭の出來　同

繭買の財布の紐の長いこと　同

凡て金銀は賤しきもの黄繭白繭　知白

頬ほてり一途に思ひつめて繭かく　同

兒の寢息かぐも安らけく繭もぐ　同

繭買の昂奮して蛇を投げ殺した　同

繭棚くづせば御無沙汰の亡き父母の額　三允

楠の殘黨で河内に住ひ繭かき　同

白魚の指もて繭をかゝれけり　同

掌に繭のせて握りしめたき　同

書架の隅にしろ〳〵と繭一つ見る　同

船で出來た繭で利根川の上り下り　同

繭

蘭　羽蟻

汝がゐくほ塡めるによろし蘭一つ　同
三良の顔が髣髴とする院展の蘭　同
田舍の小學校の教室で出來た蘭　同
牡丹に狂ふ猫は床の掛軸で蘭かき　同
乳房まさぐる子であつて蘭もぎ　同
蘭もぎの忙わしさは男の子の手女の子の手　同
風景の額のずつと奥に蘭かく家　同

○

きのふの朝かおとつひの朝が羽蟻飛んだ朝は　牛歩
人が見て居やうが居まいが立つ羽蟻だ　同
一つ飛で一つ飛で羽蟻殘らず飛ぶ　同
祖風宣揚を大師堂から立つ羽蟻　同

我爲すこと羽蟻の飛べる行衛かな　同
羽蟻這ふ柱にて去年の地震にゆるがず　同
今日から巡査の服が白くなつた羽蟻　知白
羽蟻雲と流れて法隆寺一夜に崩れん　同
一陣の風に居らずなる羽蟻夢の如し　三允
屑屋立止まり獨り言は塀の羽蟻へ　同
大變な羽蟻ですことゝ水貰ひの女房　同
シトロン飲みのこして塀の羽蟻にかけたり　同
ひどい羽蟻だと家根屋が塀を指さし　同
地震で曲つたのを直した庵の柱で羽蟻　同
羽蟻夥しき塀頰杖のうたゝ寢から覺め　同
羽蟻の行方を考へさせれた腕組み　同

羽蟻　畫顔

温泉の町の羽蟻亡ぼす焚火の一夜　同

○大正十三年六月二十五日牛歩庵に於て第七回開催

畫顔の一本道に出て何處までも一本道　知白

畫顔の百姓に無産者はない筈　同

畫顔の日中出嫁人夫が揃つた　同

畫顔の砂山に投げ出した新刊書である　同

畫顔の停車場のぽん〳〵時計は狂うてゐた　同

石炭殼山をなして畫顔のはびこり　同

畫顔咲き滿てば此村の井戸水が甘くなつた　同

畫顔の蔓引けば畫顔ずぐに萎んだ　同

病院の裏に蒼い梅が見ゆる畫顔　同

學校の道に畫顔の咲く學校がよい　同

鹽風にひつゝいて畫顔咲ける土手　牛歩

四國地圖の土佐は畫顔に長い海道　同

氷屋の一年は道具もうけだといふ畫顔　同

道しるべの札よめぬ文盲の人に畫顔　同

砂利敷かぬにかたまつた新道の畫顔　同

慾の深い地主だといはれたくない畫顔　同

幼ない記憶の草紙を垣根に干した畫顔　三允

畫顔に乞食のお産の輕い話　同

畫顔に砂いぢりのおもちやのバケッがころがり　同

田舍乙女の眼眸を象徴して畫顔　同

戸籍調べの巡査が畫顔に額の汗を拭ひ　同

つるみとんぼうとまらうともせぬ畫顔　同

畫顔蛇

畫顔は這ふまゝに高野槇の刈込み　同
庭草取が畫顔大分引きちぎつたと見える　同
劍術の稽古のあとの井戸水をかぶり畫顔　同
霍亂鰌の眼は赤い溝にて畫顔　同
味噌豆をつくくたびれの脊戸の畫顔　同
虫封じ寺への道に落ちたおもちやで畫顔　同
畫顔に迷うた道の後で聞けば馬鹿らしい　同
朝鮮牛畫顔にキャベッ一車　同

○

梁渡る蛇を思ひ寢の簀天井　牛歩
殺した蛇に最後の棒をなげつけた　同
撲つた蛇を棒の先へひつかけた重さ　同
遍路になつてからの法悅蛇も恐くなし　同
女に生れる位なら蛇に生れる　同
蛇樹にのぼり日光名物のかから雷　知白
草の湯の梁わたる蛇濛々たる湯氣　同
蛇の目が初戀の女の目に變つた　三允
迎へ提灯蛇ふむまじき草の道　同
お大師樣の話から朽繩が恐くも何ともない　同
お大師樣の罰は珠數が蛇になる　同
刈込んだチャボ檜葉の上を渡り行く蛇　同
今日二度蛇を見たといふ府下からの通學生　同
小蛇を前に尾をひろげたる孔雀である　同

○大正十三年六月三十日、知白庵に於て第八回開催

夏帽

夏帽になつてからの腑に落ちぬ素振り　牛歩
腹には何んにもない男の夏帽　同
讀みもせぬ本を持て歩く癖の夏帽　同
氣だけは若い時と變らぬ夏帽　同
何を措いても夏帽は買はねばならぬ　同
落魄といふ事を夏帽が語てゐる　同
羽織袴で本願寺の法主の夏帽　同
主人の夏帽雇人等めい〳〵の夏帽　知白
三十圓の爲替をくむバラック大工の夏帽　同
揃ひの輕い夏帽瓜を割つたやうな兄弟　同
ショーウインドーの夏帽見ては電車を待ち　三允
夏帽舞臺ではいつも申上ますの役者である　同

夏帽かぶせても〳〵取てしまふ乳のみ兒　同
病餘の神經衰弱の夏帽盤石よりも重く　同
夏帽むし齒かゝへて齒醫者へいそぐ　同
震火から逃がれて息災な紀念の夏帽　同
君の腦味噌が僕よりも多い夏帽　同
今日日曜の鍔廣の夏帽で釣好き　同
三角乘で自轉車が巧まい子の夏帽　同
鍔廣夏帽筑波への日歸り登山　同

○

蚤を逃がして一つ童話を考へた　知白
ハンモックにどうすることも出來ない蚤　同
蚤をつぶした手のそのまゝの禮拜　同

蚤　清水

強い肉の香強い酒の香にするどい蚤　同

蚤の跡我しゝむら猶衰へず　牛歩

蚤の跡をすりひろげる冷水摩擦だ　同

指の腹に眼ある如く蚤とつておさへ　同

蚤にせめられ子に泣かれても我家なれば　同

蚤の多い家の疊で麥こがしくひこほし　同

昨日逃した蚤が又今朝の新聞に來た　同

猿股を浸した洗濯鹽に浮く蚤　三允

垣越のハモニカ聞いて蚤をつぶし　同

○大正十三年七月一日、俳毒庵に於て第九回開催、兼ねて富取芳河士歡迎の筵を張る

女等を清水まではけます　芳河士

長虫の死にからが清水の底に沈で見えて　同

三度登山のいつもの清水だ　同

清水に冷されたもの皆が覗き行く　同

清水で折つた花が家の前まで來て捨てられ　同

清水の木かげに大きなむすびを恥ぢた　同

清水から後くれ通しの一人だ　同

地震のないお山の大盤石の清水　知白

空海様のお清水嘘のやうに湧く　同

日向とんぼう岩清水は筧にてとる　同

兵兒帶だらりと垂れ草清水に顔を埋めた　同

清水に住んで一生清水のありがたさを知らず　同

玉沸く清水を泥手でかきまはされてしまつた　同

大地への口つけ清水こん〳〵とわき　三允

清水

清水（誘蛾燈）

馬の霍亂きつとなほる清水貰ひに來る　同
崖の清水へと境内の蟬穴踏みて　同
清水を作る地球といふものを考へて見る　同
巡禮の癪が清水だけでおさまつたと見える　同
清水に憩ふ巡禮の若者は女であつたか　同
草清水に赤い蠑螈の腹である　同
清水に口すゝぎ手洗ひ重輕樣　同
健脚の誇りは清水ある毎に連れを待ち　同

○

誘蛾燈先にどつしりと山が黑い　芳河士
ゆうべの誘蛾燈がころんでるた　同
誘蛾燈に風死す一と時の田面　同

誘蛾燈の油が畦豆にこぼれた　同
夜這星瞬けば誘蛾燈を引く　白
秩父より筑波より低い誘蛾燈　同
誘蛾燈にさめた一本調子の戀であつた　同
輪廓ばかり黑い山が二つ現はれ誘蛾燈　同
書齋の灯が忽ち誘蛾燈となつた一刻　同
誘蛾燈このあたり水平社の村である　三允
川甚で飲んだ戻りの電車で誘蛾燈　同
馬橋早稻の出穂と合點行く誘蛾燈　同
誘蛾燈春の獲物が折々跳ねる　同
誘蛾燈收入役お茶屋の提灯で送られ　同

○

芳河士歡迎　水喧嘩

芳河士歡迎　三允

夏羽織ぬぎてくつろげば主客なし

○大正十三年七月十八日、東京府下巣鴨宮仲二四八二番地富取芳河士庵に於て第十回開催

水喧嘩の水電の放水路からである　知白

水所の葛飾の水喧嘩である　同

七月議會の水喧嘩であつた　同

水喧嘩からの明月八幡祭となる　同

水も退いて喧嘩の籤もほされた　芳河士

川上の水喧嘩川下にうつゝた　同

水喧嘩の和睦の使者は庄屋の息子だ　同

水喧嘩のこゝにも堰が切られてある　同

葬ひいくつもつゞく年の水爭である　同

水喧嘩

水爭ひの高張一本の暗さ　同

夜る渡しの止まる譯が水喧嘩　三允

夜目にも光る水喧嘩の槍の穂　同

夫巒の光りの尾が水喧嘩の凶事となり　同

夫名は勝に太郎冠者は逃げて水爭ひ　同

水爭ひの同士討が戀のいきさつ　同

月見草の仲裁に任せろ水喧嘩　同

眞赤な月が水爭の沼にうつり　同

雨乞から水喧嘩の人數となり　同

水爭ひ倉の長持から日本刀　同

歸省日誌の今宵も水爭ひ　同

水爭ひの神經が竹槍よりもとがり　同

水喧嘩　土用

水　爭ひ　相手の村が聳の里　同

○大正十三年七月二十二日、如意庵に於て第十一回開催

土用の藪から頭痛のまじないの竹を切り　牛歩

唇の色の變るほどの土用水のつめたさ　同

土用の庭に鬼南天の新芽の伸び　同

土用休みの男の子ばかり裸でくらす　同

土用休の長男の伸びた身體をつく〴〵見る　同

土用髪結て焙烙灸をすえにゆく女房　同

土用蜘蛛の敏感コヅモスくる〳〵捲く　知白

土用の埃りを浴びて皆んな低い木　同

島の土用で早鮭の赤い切身　同

土用の地袋の紙屑を掃き出した　三允

土用の蟻が行違ひさまに接吻した　同

學校足場を組んだ手入の槌音の土用だ　同

木を越して來る風の埃りの土用だ　同

お日樣素裸になればなれば土用だ　同

小供の猿股が乳のあたりまである土用だ　同

○

水雞が叩いて大地と大空が離れた　知白

ローマのことはローマ人が水雞のことは水雞が知つてゐる　同

藏前町人の豪奢を叩く或る夜の水雞　同

大泥棒がつかまつた水雞の手柄であつた　同

生洲鰻は丑の日までの命の水雞　同

水雞に叩かれたのでちつとも釣れなかつた　牛歩

水雞

鳴く水雞葭簀の外はまつくらだ　同

水雞に叩かれに女にだまされに通ふ　同

坐敷の中で鳴た樣に水雞が聞える　同

庫裡を建てかへて初て水雞に叩かれる　同

店賣のきかない新聞町の背戸の水雞　同

水雞に叩かれ〳〵百姓の頭は古い　同

畫の水雞は居ないで龜の子が泳ぎ　三

一番星見つけたと歌ふ子に水雞が叩き　同

畫の水雞の垣に近づくが見られた　同

簾越に誰も居ぬ窓を水雞叩く　同

岐阜の宿玉井屋は昔水雞が叩いた　同

水雞叩けばいらへする僧の一句かな　同

允

一石を下さゞるに盤面水雞叩く　同

愚かにも藍甕に落ちこみたる水雞　同

畫の水雞が七つ橋のどこかで叩いてゐる　同

○大正十三年七月二十八日、知白庵に於て第十二回開催

緣の柱に夏足袋の埃りをはたいた　牛歩

洗つた夏足袋の敷を延しながらはく　同

足を小さく見せたがる女で單足袋　同

夏足袋ぬいで置く柱の際の闇の上　同

夏足袋素劇の屋上の狂人がよかつた　知白

目に見えぬ煙烟である夏足袋をぬく　同

夏足袋脫がぬ程の馬鹿正直さがあつた　同

ポツト出の親子らしい停車場の夏足袋　同

夏足袋

夏足袋すが〳〵しう幾階の寒水石を踏み　同

夏足袋をぬぎ捨てゝふんぞつて寝る　耕村

緑に夏足袋のあとつけて佛を拜がむ　同

夏足袋の僧一人に街の埃り　同

暗い門口で夏足袋の銀座の埃りを拂ひ　同

汐やけた一行に眞白な夏足袋　同

夏足袋の裏のよごれ藤間勘右衛門　三允

夏足袋雪駄アスファルト道一面のまき水　同

夏足袋幾度か水を潜つた色　同

直ぐ立上る高座の夏足袋　同

辭儀がすんだら夏足袋ぬくを忘れず　同

夏足袋はきながらの暇乞である　同

女優の樂屋に夏足袋ぬがれてある　同

女夏足袋のよごれをせつながり　同

牛歩の夏足袋の裏が綺麗だ　同

夏足袋自動車の無遠慮なはねである　同

○

鮎が肥るまで一日一信をつゞけて　知白

峡空雲色が濃くなれば鮎の色がこくなり　同

鮎が緑岩に保護色の腹を見せた　同

鮎も喰はせて御山參りの講金が安い　牛歩

中食宿鮎焼ける間を一風呂　同

鮎の淵を覗く釣橋がゆれる　耕村

鮎汗

鮎川に沿うて自動車が通ふ　同
鼻曲り鮎で聞えて縣道が開けた　同
木曾は五木にかけたる鮎が生きる　同
鮎の里の傳説の神人をわかたず　同
鹽燒の鮎の瞳を眺めたるまゝ　三允
東京から日歸り自動車で鮎釣り　同
鮎の馳走の鵜平居を訪うた昔である　同
鮎川の暗い瀬音に耳を傾け　同
長良川の鮎に岐阜訛りがあるかしら　同
友釣りの鮎の愚かさが笑はれず　同

○大正十三年八月十一日、知白庵に於て第十三回牛歩不參活字を摑んで汗まみれの無駄話が多い　知白

習作の大汗が行きつまつてゐる　同
報恩の日一日と汗の尊とさがわかつて來た　同
手首の汗原稿紙で夏虫を押えた　同
夏帶をぎゆつと締めて汗ばんでゐる　同
肩のこらぬ讀ものいつの間に汗ひく　同
飛脚をやめて生きのこる爺の汗の話　三允
手を取りてそゝろありきの掌の油汗である　同
眼に入る汗をしばたゝいての三本勝負だ　同
鼻の頭に一杯汗をかいてお針子達　同
木挽の汗は鋸を手元に引く時落ちる　同
かひな一本の汗がテーブルに印され　同
素裸に滲じみ出る汗の現實である　同

汗日傘

花和尚は山寨第一の汗かき　同

橋番と語り居れば汗は止どまりけり　同

○

日の御子に今年から月の日女御子の御日傘　知白

日傘を疊んで後れ毛一本亂さぬ　同

あの顔で憂鬱症でもあるまい日傘　同

地震かと立止り疊む日傘である　允

日傘にかゝとの高い靴の女を見なれる　同

日傘斜めに首傾け氣味にてたづねる家　同

曾遊の京は丁稚がかざす日傘かな　同

姉妹同じ日傘に講習會　同

日傘かざして足のない女のまほろし　同

日傘かしげ顔見合ひての話である　同

日傘を杖にしたらよい胸突坂　同

○大正十三年八月二十七日、牛歩草堂に於て第十四回開催

大稲妻あきらかに蜻蛉洲のありか　知白

稲妻に歸らうとする默て下駄を揃へる　同

稲妻鋸山から裂けて又海にさけ　同

こゝの名物蕎麥の招牌は一茶か書いたらしい稲妻　同

稲妻に苦笑してゐる一茶見ゆるやうだ　同

稲妻に赤ン坊を泣かして頬ぱる　同

稲妻のやうな過去にも癒えぬ痛みの内面があつた　同

稲妻逃げるやうに夕刊を投げ込む　同

稲妻を浴びても悪い性根は直らぬ　牛歩

稲妻

旱つゞきの稲妻戀ふ夜もあり　同
稲妻に素裸でゐて叱られる　同
稲妻に見られても後ろ暗いことはない　同
稲妻を浴びても壊れぬ程の草の庵　同
稲光どの山掘れば金が出る　三允
稲光明日は別れの温泉壺にひたり　同
稲光女に關した罪障はいつ消える　同
稲妻に去年の此頃の夜警の話　同
稲光明日までの原稿で氣がもめる　同
私といふものを稲妻が見出した　同
堀切橋幾太刀か稲妻にきりかけられ　同
稲妻に水盜人を追ふも氣の毒　同
稲光り猫にも神經衰弱があるか　同
稲妻にふと豫言者めいた考を漏らす　同
稲光り鋸の目立の昔が神經をとがらす　同
稲妻にも戀人の瞳は遺憾なく見られた　同

○

咄ははずんでも手は枝豆を放れず　牛歩
施餓鬼會の僧衆をもてなす枝豆　同
自分のたべた枝豆の殼が一番堆い　同
枝豆たべてゐる座敷まで雨のしぶき　同
枝豆はじき出すやうには句は出來ぬ　同
油蟬まだ衰えぬ枝豆をくふ　同
どしやぶりの中を來た客に出す枝豆　同

稲妻　枝豆

枝豆

手は無心に枝豆はじきながら句案　同

雨がつゞいてがつたり涼しくなつた枝豆　同

枝豆の莢の粘ばり程の戀であらう　知白

粉膩の貌よせて枝豆はぢかれ　同

月の露臺に出て枝豆と夕刊を呼ぶ　同

お伽噺に笑て枝豆の殼が山のやうだ　同

喰つた枝豆は倍にして枝豆の殼を返さう　同

宿場の廓で枝豆はうまい　三允

枝豆はぢいて明日のことは明日にする　同

枝豆たべて東武鐵道の電化が待たれる　同

枝豆たべていろ〳〵に村の發展策　同

枝豆たべてゐて海水浴の餘興が初まる　同

ぬけ歯にはさまつた枝豆で自分の年を考へる　同

枝豆たべて許り日課の復習を忘り　同

秋蛙喧しき夜の枝豆である　同

枝豆ばかりたべてゐて素劇の役割はきまる　同

枝豆の初物を本尊様へ一盆　同

枝豆の蠅に手首の珠數を動かした　同

○大正十三年九月二日俳毒庵に於て第十五回開催

二階の窓の思ひがけぬ處から初嵐　牛歩

初嵐がしてから床の軸を代へた　同

初嵐の畑中へ避難したこと　同

初嵐が法衣かけを吹き倒した　同

初嵐日南へ出れば日南は暑い　同

初嵐

地震國の彼方より來たやうな初嵐で　知白
初嵐の土に西瓜の種子を吐き出す　同
初嵐がぶつかつて來て泣きたくなる今年　同
猫じやらしの初嵐のうしろ兵兒帶　同
海から眞直に吹くのが初嵐であつた　同
簀戸のあけたて初嵐らしう顏にあたる　同
街路樹のない東京に初嵐もあるまい　同
初嵐が新聞と團扇と原稿紙へ　三允
初嵐今日でお仕舞の林間學校　同
初嵐に踏みぬきをして躍で歩き　同
初嵐に雀は飯粒の催促　同
初嵐本箱から飛び出した屋守の子　同

○

震災一週年

今日の秋晴に思ひ出深い本堂の大屋根　牛歩
不安の思出の今もある秋の蚊帳　同
命があつて今年も亦秋風に逢へた　同
秋の寺に十一時五十八分の鐘をつき　同
三日三夜も燒けた空に今年の天の川　同
一周忌の囘向の聲に澄める川水　同
新涼が訪づれても今年は驚かない　同
捨てずに持て逃げた秋扇を今年も　同
無事に澄んでゐる今年の井戸水　同
よくも今年の九月一日が來たもんだ　同

震災一週年

秋風に吹き廻されて又もとの處へ落付いた　同
殘暑のつゞいた事にも慘しさはあつた　同
その時も交通巡査であつた今年の九月一日　同
秋風に吹かれると慾も得もなくなる　同
流言に昂りて蝗のやうに刎ねたことも　知白
地震に振つた蟷螂の斧がおかしい　同
流言蜚語を作つた秋風がうらめしい　同
太地の底にしみこんだうごめきが秋の聲となつた　同
去年も二百十日今年も二百十日である　同
十一時五十八分身にしみて默す　三丸
初嵐上野の大佛に首がある　同
バラックに九月一日襟で居る　同

殘暑の淺草公園の靜かさである　同
兩國橋の上に立ち九月一日　同
一家全滅のあとに他人が住む殘暑　同
獸想の二分間が秋の聲のみとなり　同
丸ビルのエレベーターの十一時五十八分　同
殘暑の瓢箪池の底の青い火赤い火　同
去年から秋の季に立米飯を入れる　同
施無畏の額に合掌して日傘を忘れた　同
振舞水に薄荷の味が忘れられない　同
喪家の犬が秋風の地べたをなめてよろけたのだ　同
本郷にピストルの音の九月一日　同
電車の動くが不思議でもある九月一日　同

震災一週年　轡虫

遊女の親達の嘆きがどこからともなく秋風　同

電車が動き水・道が出る九月一日　同

隅田通ひの小蒸氣に默想の時刻が來た　同

○大正十三年九月三日、知白庵に於て第十六回開催

鳴く時刻が來れば鳴き出す轡虫だ　牛歩

貰て來た轡虫が鳴き出したお可笑しさ　同

日くれの忙しい勝手で轡虫が鳴き出した　同

軒の轡虫をしめ出したら遠音がいゝ　同

朝の籠に、轡虫すましてゐる　同

がちや〳〵がほんとにがちや〳〵と鳴き出した　同

バラックをゆるがしてがちや〳〵が鳴き出した　同

轡虫いきなり武勇傳に出て來る　知白

盜汗かく寢くるしき轡虫の闇　同

天文を知つてゐるやうに轡虫が鳴てゐる　同

がちや〳〵になかれて私は弱者である　同

轡虫水平社の提灯を照して來る　同

がちや〳〵鳴て水のやうな燒酎　同

轡虫に夜と晝と間違へた背の子　三允

轡虫がよく聞える寢臺車である　同

轡虫勞働爭議の渦中にはいつた　同

無料宿泊所に轡虫が飼はれてゐる　同

一週年の地震の恐怖を轡虫はもたぬ　同

轡虫の軒端の金星の强い光り　同

バラック同士くつわ虫一匹の問題　同

轡虫　續震災一週年

近づくまゝに吾庵の轡虫である　同
バラック立退かぬ決心を轡虫がつけた　同
くつわ虫の世界で電燈消してある　同
くつわ虫の骸が永劫に沈默を守る　同
くつわ虫を庭木の枝に遠ざけだ　同
知合ひの橋番が飼て居る轡虫だ　同
牛乳配達が來て鳴き止む朝の轡虫　同

○

秋の灯の蠟燭一本の尊とかりしよ　牛歩
振古未曾有の秋風・が吹きしものよ　同
精靈菩提とすだく虫の聲々　同
秋が行てからの復興の早かつたこと　同

黍戰ぐを見ても餘震の恐さが思はれ　同
秋天に聳えて尊かつた觀音樣の屋根　同
復興第一義は何でもない天の川　知白
爆破作業の音が耳底にひつゝいて秋風　同
玄米むすび攝待の九月一日　三允
火星が近いた足もとの九月一日　同
秋の雲の去年の今日の寫眞である　同
九月一日弔旗をかゝげた町を通り　同
院展明日に延びた九月一日　同
藤椅子に長々と寢て九月一日　同
天かける火食鳥の羽ばたきの秋風　同

大正十三年九月二十六日、彼岸の終りに、知白庵に於て第十七回開催

續震災一週年

子規忌

沙魚釣りいらだち糸瓜忌を忘れず　知白
去年の地震の子規忌の事は誰も言はぬ　同
だしぬけのもずの聲で今日は糸瓜忌であつた　同
雞頭の母子二人いつまでも母子二人で　同
ことしの糸瓜はことしの糸瓜で忌日　同
子規忌から變つた下駄の詮議でもあるまい　芳河士
第三日曜の方々の子規忌　同
母堂賀宴の紀念の糸瓜が大きくなつた子規忌　同
子規忌果てし門前に先生を待てゐる　同
子規忌の歸りの小集會であつた　同
子規二十三回忌我等も老いたり　牛歩
母堂の賀に植えた糸瓜の花を見る忌日　同

無病で居ることが恥かしい子規忌　同
子規庵忌昔から拙い君の字　同
蚊帳の別れのころの忌日しみ〴〵　同
六朝でかいた子規忌の短冊　同
秋風にどこからともなく聞ゆるしはぶき　三允
雀をのがれて秋蟬糸瓜棚にかくれた　同
蓑笠を秋風が吹いて俳諧極樂　同
足を爪立て糸瓜に額あてゝも見る　同
子規二十三回忌笹の雪がこんな處に　同
大龍寺道の秋埃りを厭はず　同
子規二十三回忌二十三年前の私といふものは　同
雞頭の根方に巣を張つた土蜘蛛である　同

子規忌　栗

秋海棠ぢつと見る瞳の拿とさがあつた　同

○

墓所を撰定して栗落つる山の上　牛歩

忘れてゐた栗の木から栗が落る　同

つづけざまに栗が落ちた後の靜寂　同

庭の闇が濃くなれば栗落つる　同

雨戸をしめてから庭に栗落つる音　同

起きぬけに栗拾ひに出て風邪引いた　同

栗の毬を洋傘の先で突ついて見る　同

芝原の落栗しら〳〵夜明け　知白

傘が笑んだ學校の先生の猿袴　同

栗がはねておのが墓所のことを考させられる　同

横川中堂を知らず栗の丹波につきぬけた　同

爐の栗がはねて猿袴のほころび　同

茶屋で見てゐて拾うた栗だ　芳河士

倉普請も栗の落つるまで延び　同

栗が沈んだ淺さ掘りの井戸だ　同

お寺詣のお婆樣の袂から出た栗だ　同

水力電氣の發電所に栗の毬　三允

初茸は十日早い毬栗叩き落し　同

栗はねて造化の使命が果された　同

栗落る峠でこゝらも要塞地帶　同

秋の讃美は毬栗雄辯に語り　同

栗拾ひの到頭温泉壺まで來た　同

栗　大龍寺詣

落栗と落鮎と碧りなる淵　同

○大正十三年九月二十九日午後二時、田端大龍寺なる子規の墓に詣づべく、上野停車場に會合を約したるが、當日異常なる大雨、剩つさへ風を交へ來れるため、牛歩不參、田端停車場にて待合せ參加の約ありし芳河士見えず、知白、三允二人のみにて大龍寺に到る、即ち當日の句を揭げて、新緑社句會第十八回とす

子規の墓に關する一挿話（明治三十九年五月發行「アラレ」四ノ二の「俳神樂」から）

▽四月十九日午後、月兎、北渚と三人田端大龍寺子規居士の墓に詣でた、墓の文字は陸羯南が筆を揮はれて、嫌味なく出來てるが、裏に明治三十五年十月十九日歿としてある、九月十九日を十月十九日と書き誤つたのを、己に彫てから氣がついたので、石屋に命じて改めさせようと彫賃まで前金に渡してあるのだがまだ訂正せぬとのことだ、云々……無論今日は九月十九日となつてゐる。（三九）

車窓にくだかるゝ秋雨鷺　横丁がわからぬ　知白

この秋風居士が叱咤の聲とも覺ゆる　同

秋雨墓面を洗て針のやうな雞頭二本　同

額く敷石に秋雨の樫齒下駄がきしり　同

電話の打合せも秋時化の大龍寺行きである　三允

秋時化の上野で牛歩に殘す告知板をたづねる　同

汽車をやめての田端行の電車に牛歩をさがす秋時化　同

秋時化の田端でさがす芳河士の顏は眼鏡かけてる　同

秋時化の大龍寺道知白三允二人きり　同

秋時化に子規の石塔のほゝゑみが見られた　同

子規先生地下で秋時化の雞頭を寫生してゐる　同

秋時化の子規の墓に傘さしかけて瞑想した　同

秋時化の田端の蕎麥屋で臍の穴なる溜り水　同

秋時化の田端の蕎麥屋でバケツの湯氣　同

○大正十三年十月二日、芳河士庵に於て第十九回開催、三允缺席

蜻蛉空に流れて焚火をやめず　知白

大龍寺詣

蜻蛉

とり殘されたトマト輝く蜻蛉　同

御地藏さまのお慈悲の眼がぬれてお天氣蜻蛉　同

蒂を空にむけて干す南瓜鹽辛とんぼ　同

蜻蛉の眼玉彌陀の六字が映り　同

消息も爲替も來ぬ町裏とんぼ　同

とんぼむらゝ下に古り行く堂塔　牛歩

大都市計畫の圏内にある村のとんぼ　同

默て立てゐれば蜻蛉が馬鹿にしに來る　同

とんぼのさゝやきが聞ゆる程の靜かさ　同

あれほど群れてゐたとんぼがパッタリ日がくれた　同

山に日が落ちても明るい野のとんぼ　芳河士

厩へは引入れずに暫しのるとんぼ　同

蜻蛉

晝月が間ぬけてゐる蜻蛉の空だ　同

燒跡の草伸びしまゝのとんぼ　同

川が止まつて繁昌な茶屋のとんぼ　同

とんぼ追うて地藏樣の顏もなでゝ見た　同

こゝら簀茶屋をたゝんだ跡も見えてとんぼ　同

○大正十三年十月十五日、牛歩庵に於て第二十回開催

秋晴の發展地で芝居のろし　牛歩

秋晴小學校生徒は夏服小倉　同

蟲封じのよくきく寺の秋晴　同

秋晴の二十分で停留場へ行ける住居　同

秋晴の屑屋に古新聞を拂つた　同

秋晴の風が栗の梢をゆすつてる　同

秋晴

めでたい手打が聞ゆる秋晴　同

汽車が電車になつて秋晴の土手を走る　同

秋晴るゝ釣より網の洲つゞき　芳河土

墓地も撰み置く秋晴の一白　同

秋晴の産み遠き雛を賣る　同

秋晴の長い親橋の小橋もあつた　同

補陀落や赤門の甍の秋晴蜻蛉　知白

秋晴の家近く豆をいるやうな鐵砲　同

秋晴の能登は海より低い國であつた　同

田圃を通つて秋晴のだしぬけ鐵砲　同

卷煙草を喞へて士を働く青年の秋晴　同

佛罰の片眼の鮒がつられた秋晴　三允

井戸替の歌が井戸の中から秋晴　同

ほんとの綾瀬はこれから上手の秋晴　同

埋めた井戸が摺鉢ほどに凹んだ秋晴　同

四方柾の碁盤で秋晴の對局　同

秋晴の公園で誰れ後ろからの眼かくし　同

掘切橋いそいで五分油斷して十分の秋晴　同

寢不足の眼をとぢて秋晴の電車を待ち　同

空氣そのものに健康といふものゝある秋晴　同

棒押し脛押し秋晴御畫の小揚人足　同

それでも昔の面影が秋晴の道灌山　同

とても數へきれないものに秋晴の豆柿　同

○

コスモス

女學校を退いてほんとに淋しいコスモス　牛歩
冬服になつたうれしさコスモスに立つ　同
片假名ばかりで書いたコスモスの句の短冊　同
針の運びの心急くコスモス日和　同
コスモスに隠れたバラックの高窓　同
勝手口をガラス戸にしたコスモス晴　同
コスモス折れて小鳥もへつた　芳河士
コスモスいくらゆられても思案は亂さぬ　畑白
洗濯と張物に一生懸命のコスモス　同
コスモスの朝々何事もすが〳〵と頭に淨び　同
コスモスに病んで藥がないといふ病　同
コスモスの風彼れの談話は洗練されて來た　同

郵税不足のコスモスの官舍留守　同
コスモスに講習會の門を出るお喋舌　同
ネクタイピンコスモスに光らして挨拶　三允
コスモスに刀研師の薄茶一服　同
コスモスに何でも知らぬで通す秘書官　同
田舍の旅籠で畫立ちのコスモス　同
コスモスに力石ズシンとおろした　同
コスモスに捨猫の襟首引立て　同
コスモスそよぐ掛茶屋に汽船がついた　同
コスモスに松葉杖で散歩が出來る　同
貸ボートを上つて團子屋のコスモス　同

○大正十三年十月十九日、知白庵に於て第二十一回開催

コスモス

柘榴

たてつけの悪い木戸を這入る柘榴夕　牛歩
柘榴もきらひ讃美歌もきらひ　同
獅子に身を供養した佛の話實柘榴　同
温泉の渦きに一人柘榴くふあぢきなさ　同
めつたにあけない窓の外の柘榴　同
すつぱい女の戀といふものゝ柘榴　同
柘榴のゑみわれたのを見てぞつとした　同
頼み少ない薄日が残る實柘榴　同
店先の赤い柘榴がとう〳〵子供に盗みを教へる　知白
實柘榴を割つた赤さを見せやうとされても慰められず　同
晝の萬燈ずうと並び柘榴の黒塀　同
柘榴のゑみはじけて朝の霜晴　同

漸くありついた仕事は墓堀で實柘榴　三允
暗愁を抱て柘榴は水の上に垂れさがつた　同
窓の實柘榴胸のもか〳〵二日酔　同
あの雑誌の十月號はまだ出ぬのか實柘榴　同
請願巡査の眼に日一日と柘榴色づき　同
柘榴に冷めたい風が頰を吹くこと　同
情慾の充たされぬやもめ雞が實柘榴の幹で眼を閉ぢた　同
兩替屋の庭の實柘榴と私は浸交渉だ　同
此二三日懶惰な生活を西日の柘榴に　同
不順の陽氣で今日も空が灰色に實柘榴　同

○

夜寒の二タ世帯の三疊と四疊半　知白

夜寒

供物の梨栗に夜寒の合掌　同　白

夜寒の灯に露はしたたる成熟の乳首　同

夜寒の懐ろに握てゐる軽い月給袋　同

夜寒一番の灯は角の果物屋　牛歩

百科全書の背皮の金文字夜寒　同

句の會より碁の會の夜寒　同

一人來ぬ夜寒の客の坐布團　同

夜寒になつてから長尻の客　同

高座で湯呑を握る夜寒の手附　三允

夜寒話も郊外の泥棒沙汰　同

夜寒の雨戸をもつと靜かにしめろと叱り　同

寢ころぶ脛が瀬戸火鉢にさわつた夜寒　同

夜寒の廁でスイッチの手探り　同

海馬の敷皮の手觸りも夜寒となり　同

○大正十三年十一月六日、知白庵に於て第二十二回開催

席題が柿ときまつたら主が柿を盛つて來た　牛歩

柿が殘り少なになつた日短かになつた　同

客は皆豆柿を珍らしがつてる　同

豆柿は熟れるまゝ落るまゝにして置く　同

痳疹の熱がさめる頃柿はあるまい　同

この柿寺に辛抱してゐた甲斐があつた　同

柿の木にゐる兄が無暗に威張ること　同

三間梯子に上るには上つたが柿はとらずに降りた　同

人が柿の木にのぼると愚かしく見ゆる　知白

柿

柿の澁がぬけたやうな禁慾者である　同
柿村の學校で遲刻を叱られてゐる　同
柿の色から此一三日寒さが強い　三
古俳書を曝して柿の皮上手にむかれた　同
門内の柿に外の日和下駄の音がよい　同
電車にゆれる二階でふるさとの柿がむかれる　同
澁柿は澁柿でそれでいゝんだ　同

○大正十三年十一月十八日、俳毒庵に於て第二十三回開催

燈火親しめぬ程の長夜の懊惱がある　知白
夜長の愚作で潤筆料が欲しい　同
絡はるまゝの人事をどこまで絡はらせて夜長　同
寺にある百姓の寄合ごとの夜長　牛歩

夜長

夜長の村の由斷につけこむ地面師　同
無慾にならう〳〵と心がける夜長だ　同
椽の下の力持で甘じてゐる私の夜長　同
勉強のきらいな子が夜長の苦勞の種　同
子供が寢ほけて一ト騒ぎした夜長　同
帝國ホテルの結婚式から筆を起した夜長の小説　同
寢たかと思て訪ねた人の起きてゐる夜長　同
夜長の堀切橋で夜寒の堀切小橋　三
夜長の行燈の針の穴は江戸時代の情調　同
夜長のペンを走らせる一綴百枚　同
廢坑は永遠に夜長の蝙蝠がつめたい　同
夜長の梟がペンを放しての轉寢を起してくれる　同

夜長　渡り鳥

夜長の溢れ温泉に一人で　欠びした　同
晝間の樂燒のピチピチさめる音が蘇つてくる夜長　同
夜長の校正の眼を暫く閉ぢた　同

○大正十三年十一月二十六日、牛歩庵に於て第廿四回開催

渡り鳥が眼界から消えて日が暮れた　牛歩
澁がぬけて黑くなつた豆柿渡り鳥　同
渡り鳥を仰いで大地主の氣位　同
渡り鳥夢のやうな無線電信の柱　同
渡り鳥を仰いで午雞のトキ　同
渡り鳥湖面にぽつ〳〵落る木の實　知白
渡り鳥に湖面明放れながら水靄　同
渡り鳥が消えて本々烈風にゆれる　同

椋鳥が渡ると律義さうな北國者が來る　同
四國遍路の道後は五十一番渡り鳥　三允
四つ手を上げて渡り鳥と大分の距離がある　同
渡り鳥お上りさん達の胸に赤い徽章　同
渡り鳥に試驗及第の電報が來た　同
燈臺守渡り鳥を目送して老い行く　同
群をなせば渡り鳥も一の勢力である　同
花嫁花婚渡り鳥に一本の艪を押し　同

新緑後期第一集（終）

渡り鳥

附錄

みどり兒の泣く音

中野三允

みどり兒を心の懷ろに抱き居れり

みどり兒の泣く音藝術のリズムぞ　（三允）

藝術は其衝動を表現の完成に須たねばならぬ、衝動と表現の二者が、一切の藝術に缺く可らざる以上、藝術の一形式たる俳句に關する評論も、亦此二者から出發せねばならない、卽ち自己の存在を覺知し、生の尊嚴に歡喜する處に、生活向上の氣分（衝動）が溫醸される、轉ずる石に苔蒸さず……刻々に淸新なるサムシングを掘り出す鍬は、頭腦（衝動）を離れた手に握れない、魂のない作品は「チレッタント」の玩具に過ぎないのだ。

藝術的衝動が自己の生活以外に一歩も踏み出すことの出來ぬのは當然の理で、芭蕉の句が佳吟は勿論、駄作であつても、尙棄て難き思をするのは人生と文藝とを引離さず、一元的に見て居つた處にある、俳句に依て生活の向上を圖り、生活に依て俳句の進展を求める……よりよき生活の創造卽俳句といふことが、芭蕉の努力的境地であつたと同時に、亦吾人の理想でなければならぬ、古池の吟の價値批判は、古往今來聽聞を餘儀なくさるゝに飽いて居るが、混亂せる俳壇の時代思潮に棹さして、其最も要求する藝術上の哲學的基礎を明示したる點に對し、史的尊嚴を首肯せざるを得ない所謂芭蕉のサビなるものも、芭蕉の生活味に外ならないのである、大膽に眞摯に熱心に自己若くは自己人格の內的精髓を發表するといふことが所謂自己告白であるならば、芭蕉は卽ち自己告白の殉教的勇者である。

「アリストテレス」は云うた、人生の半ばは富者貧者の區別がないと……蓋し睡眠が一時の死であつて、地上に公平を回復するを意味して居るのだが。吾人は別の觀察から尙此語に共鳴する、人

生の物質的境遇卽ち或者は幸福を權威に求め、或者は之を學問又は財寶に求め、或者は又之を肉體の快樂に求めるに等差はあるが、萬民の享受し得べき普遍圓滿なる精神的幸福……之を小にして俳壇の上に見て、自己の人格を告白し得る人は、必ず他の人格を動かす人である處に、自己告白の無差別的福音がある。

藝術の福音は自己告白の外にない、そこに個性の根本的發達がある、但し自己告白だからとて、陋劣なる凡人の自叙傳を草し、個性發揮を楯に人間の獸的性癖を暴露して、得々たるものがあるとすれば、それは非常なる誤解でなければならぬ。人間の心意の不羈奔放な狀態から來た無反省なる自墮落の作品は人間としての完成に分秒も惰容あるを許されないことを忘却した結果であつて、藝術的效果の幻滅を感ずるも亦止むなき次第である、生きた役者の死せる表情よりも、死んだ人形の生きたる表情に人間性に根ざされた藝術があり、操る人の自己告白が味得せらるゝに考へるがよい。

よく寫生といふことが論ぜらるゝが寫生も亦自己告白である、自然を有の儘模倣するのが寫生の主張であるが、乍併寫生が無批判的な集錄を以て能事とす可らざる以上、自己の經驗撰擇を經、鍛

練された主觀に依り、初めて自然に對することゝなる、然らば卽ち寫生は客觀的表現の手段から、自己を告白する態度を指すのである、吾人の內面的創造性を永遠に刺戟して、澄み渡つた獨自の世界を展開して呉れるのは自然である、生命の糧として、キリスト教徒ならばバイブルを讀み、佛教徒は佛典を、儒教の人は四書を讀むよりも尙痛切に、吾人は自然からの刺戟を味得して、人間としての完成に急がねばならぬ、平面描寫の自然に對する素直な習作から、玲瓏透徹なる立體描寫の深幽なる藝術の眞境地へ……。

次に俳句とは何ぞやといふに、短篇小說の生命が人物なり、事件なりにポイントを握て之を描き其一點で全體の光景なり推移なりを髣髴たらしむるにあるが如く、俳句は一層徹底的に、千種萬態の世相を吾人獨自の坩堝に投じ、熔鑄陶冶して始めて千種萬態の世相を體得したる眞情を端的に表現したる藝術的一形式、換言すれば一個の詩として、既往は勿論、現在否將來に於ても、最も短小なる形式を具したるものが、卽ち俳句である。

俳句の傳統的要件として十七音字と、切れ字と季題との三者がある、此三者は歷史的に肯定され

て來たので、偶然的にか、必然的にかといふことになると、問題であるが、吾人は之を生理的に稽べて必然の結果であると信ずる、假りに偶然視せらるゝ場合があるとするも、それば必然に助勢せる善意の偶然であらねばならぬ。成る程十七音字が連歌の上の句から來たのは、誰れも知る處で、それは一時の感興からして機智を弄し合つた、偶然的のものかも知れない、併しこれすらも上の句丈けで都合よく一息に歌ひ得て、下の句に詠み移る第二息の吸込まふとする瞬間の氣分を、他の人に移す境地は、連歌を以て最も安價に見積つた單なる消閑戯としても、相當の魅力を有して居るではないか、そこで上の句が出來ても下の句が出來ぬ場合が度重なる、初めは片輪の作物のやうな氣がして物足らなかつたのが、連歌から俳諧に變遷して愈々其數を增すに從ひ、發句のみでも十分に興味を感ずることが出來るので、軈て獨立した完全の一形式となつた、が其根據は日本の文字で表現する最も短き詩形として、一呼氣で工合よく歌ひ得るに適して居るからであらう、こゝに歌ふといふのは何も變な調子をつけて歌ふといふ意味ではないが、兎に角發句の獨立が偶然であるとしても、發句の前身たる和歌の上の句が十七音字であるといふ點が必然的なるを思はなければならない

切れ字も音律の上から必要なるばかりか、內容を廣くするとか、深くするとか、强くするとか、輕くするとか、活殺自在ならしむる手段として有利なるものである、季題の必要も連歌や俳諧の法式に束縛せられたる以外に必要なる點が十分にあるが、後に論ずることゝして、要するに俳句の傳統的要件たる上記の三者は、皆必要のものとして正當に論議せられた。

然るに此頃は傳統的要件を重要視せず、字數に制限を置かず、切れ字の如きも特に必要視せず、季題をも排斥するものが現はれた、それが俳句であるかないかといふ議論も、隨分世間に喧しいが殆んど其悉くが形式の問題に囚はれて名義上正閏の爭をやつて居るに過ぎない、吾人は名義に執着せざる立場から早くそれを片付けて仕舞ひたく思ふ、俳句でないとすれば俳句でなくてよい、俳句だとすれば俳句で、無名詩なら無名詩でも構はぬ、其內容に就て玩味するがよろしい、レーニンが采配を振てゐる露國の勞農政府に對しても、過激派討伐の方針を改めて、緩衝地帶の折衝に苦心する時代である、內容さへよいものがあれば、日本に於ける一個の詩として、保護してやるこそ、眞に藝術的良心を把持して居る者の任務であらう、俳句の異端者か忠義者かは他日に徵するとして、藝

術の異端者であると斷ずる丈けは確かに早計である、狹量である。

「ベルトランド、ラッセル」はいうて居る、凡そ人は二つの衝動に依て支配される、一つは物を造らんとする衝動で、他は物を所有せんとする衝動であると、曾ては基礎工事の堅牢無比なるを誇つた、俳句の三要件を、事もなげに因襲なり慣例なりとして一擲し去ること、辨慶橋の埋立問題よりも無雜作なる解決を與へて、自ら近代人を標榜するに對し、反て之を良風美俗なりとして神韻縹渺たる圓光でも射すが如くに取扱ふ、李遠張順水陸の鬪爭も斯くやとばかり、吾人は歴史家の資格と預言者の位地とを併有する人間ではないが、名義の問題は姑らく第二として、內容が果して、吾人の味覺をそゝるに足るや否やを注意す可きである、眞情發露の自然の節奏にだにかなつたならば、必ずしも十七音字でなくてはならぬ譯であるまい、其作者も强て俳句なる名稱に戀々たるは愚の至りで、舊殼外皮の除去に勇あるものとして、何故に俳句の二字を棄てざるやは怪訝に堪えぬ。

傳統尊敬論者も徒に退嬰主義を取り、依然として舊態に滿足することを止め靜止、固定、限定の範圍內に於て、フレッシュなる道義的志操の上に最大なる程度に演繹的生活をするならば、必ず意

義ある作品を示すに足るであらう。

語を寄す燦然として光彩を放てる麒麟閣上星羅の王侯將相、庶幾くは詩の日本を以て紅紫爛熳とりどりの藝術の花を開かしめよ、松平定信に依て斷行した、所謂寛政異學の禁にも髣髴たる時代錯誤の擧に出づるなく、現代の健全なる要求と十分なる交渉を保つて、妄動的なる喝采を排し、紅顏綠黛の青年、青想妙齡の佳人も玻璃の器が脆くして直に碎くるが如きを忘れず、「人間よ汝は汝の創造したるものに一瞬間でも拘泥するな、そこに汝の生命汝の自由を奪はんとする恐ろしい死が潛で居る」というたニィチエの言を進行の曲として、藝術上に不生產の人物となり了つた累々たる生きた死屍を踏み超え、未來に對して絕えず憧憬を持つラッパの響高く……。

附記。 終りに季節の問題について一言する、吾人は季節を咏み込むことを不必要とする意見に全然反對したくはない季節を入れずに季節を入るゝ以上に、否以外に藝術上の價値あるものが出來るなら、吾人は謹で頭を下げる、が日本に生れて、春夏秋冬鑿然たる雰圍氣中に生活して居る我々として、之を排斥するは同意することが出來ない、勿論彼の季題趣味の說明に沒頭した句は所謂囚はれ

みどり兒の泣く音

たるものに相違ないが、無上の天惠に浴し、自然に感謝すべき天職を生れながらに賦與されたる、國民性の發露として季題乃至季感の贊嘆は、尠くとも日東米食民族の特權である、と共に義務でなければならぬ。（九、六、六、稿、俳句大觀掲載）

再記。 吾等の態度は必ずしも俳句なる名稱に拘泥せざるものである、從て字數の多少から來る形式論の如きは何等の痛痒を感ぜないといふことを改めてこゝに聲明する、乍併同時に吾等は從來の形式による句を全然排斥する次第でない、之れ余が嘗て俳壇縱斷論を草して、宜しく其内容に就て玩味し、從來の形式によらざる句の内の駄作と佳吟を左右に分類し各佳吟は之を一團とし各駄作は同列に斥くるを可とした所以である、季節尊重も前述の通り、課題がよいか、わるいかは說き漏らしてあるが、之れは作者の氣分一つでよくもなり、あしくもなるのだ、内面的創造性の刺戟は、長槍短劍機に臨み變に應じて人でも馬でも斬るのである、課題があるとそれに囚はれるなどゝいふのは、課題がなくとも何者にか囚はれて居る者の氣取つた言葉でなければ幸である、自己の人格を告白する勇者の前に、課題の可否の如きは一顧にだも値せぬのだ。（一四、一、八）

大正十四年一月二十五日印刷
大正十四年一月二十八日發行

定價金一圓

著者　東京府南島飾郡南綾瀨村大字下千葉八七　伊東快順
著者　東京市本郷區西片町十番地　齋藤伊三郎
著者　東京市小石川區關口町六十五番地　中野準三郎
發行人　東京市小石川區關口町六十五番地　中野準三郎
印刷人　東京市本郷區湯島六丁目十六番地　中村利七
發行所　東京市小石川區關口町六十五番地　新緑社

遍路採梅迷苦惑から悟樂善
餘寒の財布に戸閉てずの庄屋の敷居かな

亂山突兀俳徳無邊

往返見聞

奉巡拜四國靈場八十八個所

同行二人

暮雲滲漬醫藥分業

蓋より一足先拵養に着にけり
四國の土が遍路にほ、笑む下萌え

東京市小石川區關口町六五
三允 中野準三郎
明治十二年七月廿三日生

遍路探梅迷苦惑から悟樂善
餘寒の財布に戸閉てずの庄屋の敷居かな

亂山突兀俳徳無邊　往返見聞

奉巡拜四國靈塲八十八個所

同行二人

暮雲滲澹醫藥分業

燕より一足先撫養に着にけり
四國の土が遍路にほ、笑む下萠え

東京市小石川區關口町六五
三允中野準三郎
明治十二年七月廿三日生

中野三允著

俳遍路

豫約前金　申込金五圓也　（但シ冊數未定）

四國ハ弘法大師誕生ノ地デアッテ之レガ歸依者ハ大師ニ緣アル八十八ケ所ヲ巡拜シマス、小生等ハコヽニ所謂俳遍路ヲ企テ大師ノ御遺跡ヲ訪ル、コト、イタシマシタ、其記念トシテ、高野山、長谷寺、叡山等ヲ初メ往返ノ見聞ヲモ詳細ニ記シ感想ヲ加ヘ俳句ニ川柳ニ其他ノ作物ヲ交ヘ全努力ヲ以テ後世ニ遺サントノ覺悟デアリマス、併シ二ケ月ノ日子ト勘カラザル失費ノアルコト故出版ノ費用ガ直ニ問題トナッテ來マシタ、就テハ小生ノ此企テヲ贊助セラル、諸賢ニ對シ同書購讀ノ豫約ヲ御願ヒイタシテ負擔ヲ輕減シタイト考ヘマス

平素ノ御交誼カラ申スナラバ御高批ヲ仰グベク机下ニ呈スルガ至當デアルノデスガ、右ノ次第ニ付却テ反對ニ平素ノ御交誼ニ甘ヘテ御購讀ヲ御願ヒイタス次第デアリマス

出版ニハ全然素人デ別ニ算盤ノ上デ損得ヲイフノデハアリマセンガ、筆ヲ執リナガラ賣レルカ賣レヌカト心配シテ居ルヤウデハ、トテモ奇拔ナ呑氣ナモノガ書ケマセンノト、雜務ニ關スル手數ヲ省クタメ前金デ豫約ヲシテイタダイテ、ソレヲ郵便局ニ貯金シ、一部宛出版ノ出來タモノヲ順次ニ配本シ、本年十月頃迄ニ完成シタイ考ヘデス先ハ御依賴迄　敬白

大正十四年一月

出版責任者　三允拜
同行者　牛歩
知白

廣告募集　一ページ　金拾五圓也

俳遍路前金豫約申込所

東京市小石川區關口町六五
中野準三郎
振替東京三六五一六番
電話牛込一七二三番

285
4
145

285
4
148

終